4．戦前の日暹間における知られざるスポーツ親善事業について
―暹羅国への柔道師派遣を中心に―

常磐会学園大学　井上　敏孝

キーワード：暹羅、柔道、黒山高麿、スポーツ、親善事業

4．Unknown sports friendship projects between Japan and Siam before the war
-Focusing on the dispatch of judo masters to Siam-

Toshitaka INOUE　(Tokiwakai Gakuen University)

Key words : Siam, Judo, Kuroyama Takamaro, Sports, Friendship Events

Abstract

This paper focuses on an unknown exchange project that took place between Japan and Siam before the war, and attempts to clarify the significance of the project.

Specifically, a group of judo masters was dispatched from Japan to Siam before the war as part of a friendship project between Japan and Siam. The group taught judo to local youth in Siam, and contributed in no small way to the spread of Japanese culture and friendship between the two countries through their instruction and courses.

However, previous research has not clarified the fact that judo masters were dispatched from Japan to Siam.

Based on the above, this article aims to shed light on the outline and significance of an exchange event held between Japan and Siam through judo over 85 years ago, while also analysing newly unearthed historical materials.

本稿は戦前に日本と暹羅国の間で行われた知られざる交流事業にスポットを当て、同事業の意義について明らかにしようと試みるものである。

具体的には戦前期、日本と暹羅国との親善事業の一環として、日本から柔道師範一行が暹羅国に派遣されていた。そして、一行は同国において現地の青少年に向けて柔道の指導を行うとともに、指導や講習を通じて日本文化の普及と両国の親善に少なからず貢献することとなった。

しかしながら、従来の研究では、日本から暹羅国に柔道師範が派遣されていたことについて明らかにされてこなかった。

以上のことを踏まえ、ここでは、著者が新たに発掘した史資料分析を加えつつ、今から85年余り以前、日本と暹羅国間で柔道を通じて実施された交流行事の概要と意義に解明していくことを目指す。

1．はじめに

本稿は戦前に日本と暹羅国の間で行われた知られざる交流事業にスポットを当て、同事業の意義について明らかにしようと試みるものである。

同時期、暹羅国との親善事業の一環として、日本から柔道師範一行が暹羅国に派遣されていた。そして、一行は同国において現地の青少年に向けて柔道の指導を行うとともに、指導や講習を通じて日本文化の普及と両国の親善に少なからず貢献することとなった。

しかしながら、従来の研究では、日本から暹羅国へ柔道師範が派遣されていたことについて明確にされてこなかった。このことは戦前の日本と暹羅国あるいはタイを巡る歴史研究だけでなく[注1)]、大東出版社『日本柔道史』[注2)]等をはじめとした柔道史等の研究分野においても、同様であった。

以上のことを踏まえ、ここでは、講道館の機関誌である『柔道』や暹羅協会の会報等の記事に加えて、著者が新たに発掘した史資料分析を加えつつ、今から85年余り前に日本と暹羅国間で実施された柔道を巡る交流行事の効果と意義に解明していくことを目指す。

2．日暹羅関係の沿革

本稿でスポットを当てる事業が実施されたのは、1937年であったが、当時の日本を取り巻く国際情勢は大きく以下のような状況であった[注3)]。

まず1931年の柳条湖事件に端を発した満州事変勃発後、国際連盟の決定によりイギリスのリットンを団長とする調査団が５カ月にわたり日本・満州・中国各地を訪れ、リットン報告書を提出。同報告書では日本の特殊権益を認めるとともに、満州国に代わる自治的政府を樹立することを提案することとなった[注4)]。

当時の日本は国際連盟の常任理事国であったものの、1933年２月24日の国際連盟総会では、中国の統治権を承認し、日本軍の撤退を求める報告案に対して、賛成42、反対１（日本）、棄権１（暹羅）という形で、各国の意思が示されたため、反対票を投じた松岡洋右ほか日本代表団は議場から退場。日本は連盟に脱退を通告し、２年後の1935年３月27日に正式に脱退することとなった[注5)]。

当該勧告案に対し、暹羅は国内経済に深く関わっていた中国人の存在や、英仏、そして日本との経済的関係を考慮して、中立の立場をとる意味で棄権票を投じることとなったとされる。しかし、議場にいた日本と暹羅以外の全ての国が勧告案への賛成票を投じたことから、国際連盟総会

における決議で、棄権票を投じた暹羅の姿勢は、日本では好意的に受け止められ、暹羅への注目を高め、連盟脱退後、関係の緊密化が図られることとなった[注6)]。

3．柔道師範の派遣

（1）黒山高麿

まず本稿で取り上げる派遣事業において実際に派遣された柔道師範について概括したい。派遣されるに当たって、その代表を務めることになったのが、黒山高麿氏であった。

1895年、福岡県の神武東征の聖跡という古い由緒を持つ神武社の歴代の宮司の家の４男として生まれた黒山氏は、福岡県立東筑中学校時代から柔道が滅法強かったことから[注7)]、1914年の同校を卒業後ただちに武道専門学校４期生として入学。３年後の1917年に卒業後、広島県師範学校・広島県工業学校の柔道教師に就任[注8)]。翌年には山口県徳山中学校の教諭に転じ[注9)]、1922年からは大阪府警察部・大阪府立生野中学校・大阪刑務所等の柔道教師に就任[注10)]。さらに柔道師範としての勤務と同時に同年10月には武道と修養を目的とした「洪火会」を創立し、結成後、同会の会長を務めている[注11)]。そして1932年に当時大阪市天王寺区東高津に本部開館を建設したことを機に同会は活動を本格化させた。1926年５月には教士の称号を拝受し[注12)]、1941年に６段に昇段している[注13)]。

ちなみに徒手格闘術としての日本拳法の創始にも黒山氏は少なからず影響を与えていた。具体的には明治以降に柔道が近代スポーツとして発展する中にあって、柔道の源流となる「柔術の強力な武器」であった当身技が廃れつつあることを憂えた黒山氏が、当時、関西大学柔道部学生であった澤山勝氏に当身技の復活と安全な稽古法の研究を要請することとなった。その後、1932年に澤山氏によって日本拳法が創始されたとされる[注14)]。

（2）派遣計画の概要

先述したような情勢下において日本国内では1937年の春ごろから大阪洪火会主催で、大阪毎日新聞社・東京日々新聞・財団法人暹羅協会が後援の下、暹羅への柔道師派遣の計画が進められることとなった。同会が掲げていた派遣の目的は以下の通りであった。また詳細な趣旨は表１を参照されたい[注15)]。

> 友邦暹羅国に於ては我昭和七年其革命成就以來鋭意新興暹羅の建設に精進中なるが國民精神振作及國民體育興隆の一方途として柔道の奨励に努めたる結果今や同國青少年の間に盛んに普及しつゝあるのみならず國立體育専門學校及警官練習所にありては既に成科として之を課しある現状なり。然るに従来正規の修行を経たる我柔道専門家が同國を訪れ或は柔道の教授をんしたることあるを聞かず仍て此際特に之を派遣しその實情を具に視察せしむると共に又假令短時日たりとも講習を行はしめて更に正しく柔道の神随を傳へ日本精神の精華を披露せしむることは日本固有の文化たる柔道の世界的普及の上に一大利益を収むるのみならず一面日暹兩國の親善促進の上にも効果尠なからざるべきを信ず故に茲に左記の計畫に従つて柔道師範を派遣せんことを企画す、諸方有志の絶大なる援助を切願す。

表１　派遣の趣旨

目的	我国の精華たる柔道の神随を伝え、日暹親善の一助とする。	
期日	1937年７月28日～ ９月初旬	
	そのうち10日あまりは盤谷に滞在の予定。	
派遣員	大日本武徳会教士同六段講道館六段	黒山高麿
	大日本武徳会教士講道館六段	濱野正平
	大日本武徳会教士堂柔道五段	荒井一三
	大日本武徳会教士柔道四段	三好正三郎
	大日本武徳会教士柔道四段	山本博
派遣方式	在盤谷日暹協会の招請による。	
費用	我国公私団体及び個人の寄付による。	

出所）財団法人暹羅協会『財団法人暹羅協会々報』第８号、1937年から著者が作成したもの。

以上のように同派遣事業は、日暹両国の親善促進の一端として暹羅国における柔道普及の実情を視察するとともに、指導激励を行うことで、同国における柔道文化のさらなる発展を企図したものであった[注16)]。

実際の派遣計画の円滑な進行のために、同派遣の形式は在暹有力法人あるいは団体の招待による形式が採られ、実際には駐在武官の田村浩陸軍中佐が斡旋を行うこととなった[注17)]。

しかし、3,800 ～ 4,500万円と予定されていた派遣にかかわる費用は、表１の通り、その全部あるいは大半は本事業の援助者の寄付で賄うとして、在暹羅人乃至団体・暹羅国側には「形式の如何二拘ラズ一切經濟的負担ヲ掛ケザルモノトス」とされた[注18)]。

同事業に対して寄付を行った団体等は表２の通りであった。

表2　寄付団体一覧

会社名	肩書	氏名
住友合資会社	経理	小倉正恒
大日本紡績連合会	委員長	庄司乙吉
伊藤忠商事株式会社	社長	伊藤忠兵衛
安住大薬房	店主	安住伊三郎
神戸製鋼所	社長	田宮嘉右衛門
川崎造船所	社長	鑄谷正輔
石原産業海運株式会社	社長	石原廣一郎
三井物産株式会社	会長	井上治部兵衛
三菱合弁会社	総理事	串田万蔵
日本車両製造株式会社	社長	三瓶勇佐
渡邊鉄工所	社長	渡邊福雄

出所）「体育並運動競技関係雑件 第五巻 28. 柔道家黒山高麿外暹暹羅訪問関係」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B04012483300、体育並運動競技関係雑件 第五巻（I-1-12-0-2_005）（外務省外交史料館）から著者が作成したもの。

（3）派遣団のスケジュール

上述の計画は順調に進捗し、一行は1937年７月28日に神戸港から三井ライン乾隆丸にて盤谷に向けて出発。乾隆丸の詳細については図１を参照されたい。そして８月10日盤谷に到着した後は、あらかじめ先方で設定されていたプログラムに基づいて、各種行事が執り行われることとなった[注19)]。実際の派遣団のスケジュールの詳細は表３を参照されたい。

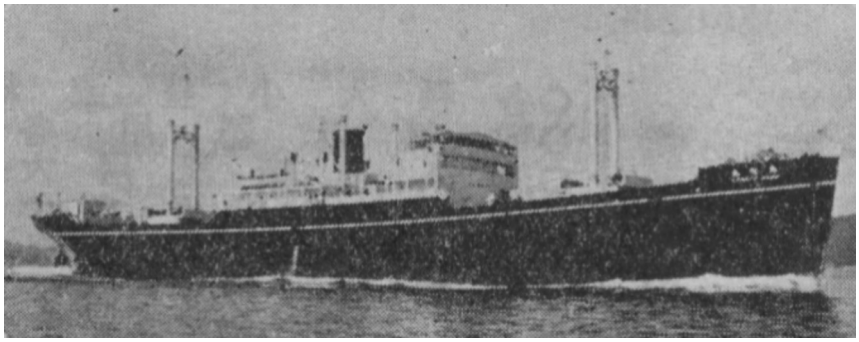


図１　乾隆丸
出所）日本工学会『工学会大会記録 第３回』、1936年から転載したもの。

表３　盤谷における派遣団一行のスケジュール

日付	時間	概要
８月10日	午前９時	盤谷到着後、日本公使館、駐在陸海軍武官公館訪問。
	午後０時30分	田村駐在陸軍武官招待の午餐会に出席。
	午後２時	文部省体育局長訪問。
	午後２時30分	日暹協会長ビア・シリシチカーン・バンチョング氏訪問。
	午後７時30分～９時30分まで	スワンクラブカレッジ講堂において柔道の講習を実施。講習参加者約150名あまりで、参観者は1,000人に上る。同17日まで同場所同時刻において連日講習を実施。
８月11日	午前10時	三井・三菱・正金各社及び在留邦人有力者を訪問。
	午後７時30分～９時30分まで	スワンクラブカレッジ講堂において柔道の講習を実施。
８月12日	午前９時	摂政首席プリンスアジト殿下の宮廷において拝謁。久世福岡市長から皇帝陛下に献上の博多人形を棒呈する。
	午後１時	三井物産船舶部招待の牛、午餐会に出席。
	午後３時	宿舎において天田領事の暹羅一般事情に関する講演聴講。
	午後７時30分～９時30分まで	スワンクラブカレッジ講堂において柔道の講習を実施。
８月13日	午後０時30分	中堂駐在海軍武官招待の午餐会に出席。
	午後４時	陸軍士官学校において国防大臣ルヤング・ピブーン氏に会見。陸軍関係ならびに同校生徒のために柔道エキシビションを実施。その後、国防大臣の招待茶会に出席。
	午後７時30分～９時30分まで	スワンクラブカレッジ講堂において柔道の講習を実施。

8月14日		三井・三菱・正金三社合同招待の午餐会出席。
	午後3時	宿舎において三井社員陳大欉氏の暹羅国の經濟に関する講演を聴講。
	午後7時30分～9時30分まで	スワンクラブカレッジ講堂において柔道の講習を実施。
8月15日	午前7時	日暹協会の招待によりアユタヤを訪れ､アユタヤ王朝の古跡を見学。山田長政の杞廟に参拝。帰途、日暹協会副会長のプラ・ピピット・サリー氏の私宅に招待。
	午後7時30分～9時30分まで	スワンクラブカレッジ講堂において柔道の講習を実施。
8月16日	午前5時	警官学校において柔道エキシビションを実施。
	午後1時	宿舎において駐在陸軍武漢田村中佐の暹羅国郡司に関する講演を聴講。
	午後4時	村井公使招待の茶会に出席。
	午後7時30分～9時30分まで	スワンクラブカレッジ講堂において柔道の講習を実施。
	午後10時	日本人会主催の歓迎会に出席。
8月17日	午前9時	文部科学大臣兼海軍軍令部長ルヤング・シン氏の官邸を訪問。
	午後1時	外務大臣ルアングブラデイット氏を外務省に訪問。
	午後2時	総理大臣ピヤパホン氏を官邸に訪問。
	午後3時	海軍海兵団において柔道エキシビジョンを実施。ついで暹羅海軍艦隊を見学。この日を以て講習修了。チイム・アテプレマナンダ氏に初段を推薦することに決定し、なおかつ1級以下6級まで87名に対して進級証書を授与する。
	午後10時	日本人会青年会招待の歓迎会に出席。
8月18日	午前中	日本公使館・駐在陸海軍武官公館・日暹羅協会・三井・三菱・正金各社の在留日本人有力者を歴訪して離盤の挨拶を行う。
	午後1時30分	大阪商船バタビィア丸にて出港。

出所）講道館「洪火會暹羅國訪問　柔道普及宣傳旅行の記」『柔道』昭和12年10月号、1937年等から著者が作成したもの。

同表からも分かる通り、派遣団一行は、盤谷到着初日から、帰国前日の17日まで連日150名余りの受講者に向けて、講習を行うとともに、その合間を縫って陸軍士官学校や警官学校や海軍海兵団において柔道エキシビジョンも行っていた[注20)]。こうした取り組みでは、先述した黒山氏の師範学校を始めとした教育機関や警察における柔道教師としての経験が発揮されたものと思われる。

さらには9月5日に神戸港に帰国するまでの間[注21)]、一行は暹羅国における政財界を始めとした関係者及び団体との会合や親善・交流行事にも積極的に参加し、各界の有力者との関係構築に尽力することとなった。こうしたことから､黒山氏を筆頭とした柔道師範の派遣事業は､「多大の成功を収め」るとともに「充分に目的を達成」したとされる[注22)]。

3．親善事業後の効果

帰国後、団長であった黒山高麿氏が帰国挨拶のため上京する機会に同氏の労を労う目的で暹羅協会では三井暹羅室と合同で歓迎の宴を主催し９月10日に上野翠松園で開催する運びとなった[注23)]。

上述の師範一行の派遣の成功を受けて、1941年８月には大阪毎日新聞社・東京日々新聞の斡旋により、タイ国の柔道選手の一行が来日し、同年８月９日に華族会館に招待、歓迎晩餐会が開催された[注24)]。

その後、機関紙『柔道』上に『暹羅国に於ける柔道の沿革一般』と題して、黒山氏が同国における柔道導入の沿革と普及状況、さらには今後の展望についてまとめた記事が掲載されている[注25)]。

また派遣を受けた暹羅国では、表３の通り柔道の講習を受けたことで講道館初段の免状を所得した暹羅国のスワンクラブ柔道教師のチイム・アテプレマナンダ氏が、1937年11月７日に実施された第２回総選挙において中部暹羅から初めて立候補し、最高点で当選することとなった。このことで、同国に初めて講道館柔道初段の代議士が生まれることとなったとして現地でも大きく取り上げられることとなった。このことを受けて派遣員の一人であった濱野正平氏は「如何に柔道熱の旺盛なるかは想像に難くはない」、そして『宜しく柔道精神を以て國是とせられよ』との意見を機関紙『柔道』に寄せている[注26)]。

こうした点も派遣事業の効果と暹羅国に与えた影響の一端として見ることができよう。

以上のように成功裏に終わった同派遣事業であったが、このことは、当時において「我國柔道の海外発展の上」で「一大劃期的壮擧」[注27)]として大きく評価されることとなった。それとともに暹羅国における「柔道の行程を、是正刺戟し、一面我が國固有の文化を其の朝野に向つて顯揚し、しかも、所謂國民外交の實を擧げ來つた事は、斯道のため、又時局柄、實に欣快に堪へないところである」として、柔道を通じた両国交流・親善に少なくない影響を与えたとして、その歴史的意義が指摘されてもいた[注28)]。

このように同事業が注目された背景の一つには、当時における日本を取り巻く国際情勢が少なくない影響を与えていたと思われる。具体的には、先述した通り国際連盟を脱退した日本では、タイとの関係の緊密化を図る動きが大きくなっていたが、そのような中において、柔道師範の派遣という形での暹羅国との交流・親善事業は、日本だけでなく暹羅国においても、注目を集めていたとともに、意義の少なくない事業として位置づけられていたといえよう。

ちなみに、1941年３月まで町の公安委員会で委員長を務めていた黒山氏は同年、町長選に初出馬し当選。福岡県芦屋町の町長になり[注29)]、同町における競艇の誕生に尽力することとなった。黒山氏はのちに柔道８段に昇段していた。当時の黒山氏については図２を参照されたい。

さらには60歳を超え、町長を務めながらも、各地で柔道大会があると「彼の顔の見えぬことはない」と、その活動ぶりや柔道界の発展への貢献ぶりは、地元、福岡を代表す人物の一人であるとして紹介されてもいた[注30)]。



図２　芦屋町長時代の黒山高麿氏
出所）夕刊フクニチ新聞社ふるさと人物記刊行会『ふるさと人物記』、1956年から転載したもの。

4．おわりに

ここまで戦前の日本と暹羅国で行われた柔道師一行の派遣事業にスポットを当て、その詳細や意義等について明ら

かにしてきた。ここで明らかにできた点は大きく次の２点である。

まず１点目は、同時期に日暹関係の親善事業の一環として実施された派遣事業の概要について明らかにできた点である。同事業は、特殊な両国関係を踏まえつつ両国の関係性のさらなる進化を目的とした文化事業でもあった。

２点目は、本稿で明らかにできた点が、従来の研究で明らかにされていない新規性の内容であることである。本研究で明らかにできた内容は、日・タイ関係史の知られざる一面であるとともに、戦前のスポーツ史や柔道史等の当該研究における穴を埋める研究になると考える。

しかしながら、同事業が戦後の日本とタイとの関係や柔道を巡るスポーツ親善事業等に与えた影響等については本稿では明らかにすることが出来なかった。こうした点については、今後も研究を継続することで、解明していきたいと考える。

本文注

注１）日本タイ協会『タイ国情報』各年度版

注２）大東出版社『日本柔道史』、1942年

注３）井上敏孝「戦前の３大博覧会で建設された暹羅館」『タイ国情報』第56巻第９号、2022年、p.91

注４）明成社『最新日本史B』、2004年、pp.239-240

注５）JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A03021877900、御署名原本・昭和八年・詔書三月二七日・国際聯盟脱退ニ関スル詔書（国立公文書館）

注６）外務省ホームページ　（令和５年６月20日閲覧）
https://www.mofa.go.jp/mofaj/ms/da/page25_000901.html

注７）夕刊フクニチ新聞社ふるさと人物記刊行会『ふるさと人物記』、1956年、p.501

注８）宮内省監修大日本雄弁会講談社『昭和天覧試合―皇太子殿下御誕生奉祝―』、1934年、p.805

注９）印刷局『職員録　大正８年』、1919年、p.1125

注10）中等教科書協会『中等教育諸学校職員録 昭和２年５月現在』第24版、1927年、p.203

注11）前掲書（8）、p.805

注12）大日本武徳会本部雑誌部『武道範士教士錬士名鑑 昭和12年』、1937年、p.173

注13）前掲書（8）、p.805

注14）日本武道協会ホームページ　（令和５年６月18日閲覧）
https://www.japanesebudo-assoc.com/%E5%8A%A0%E7%9B%9F%E6%AD%A6%E9%81%93/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E6%8B%B3%E6%B3%95/

注15）財団法人暹羅協会『財団法人暹羅協会々報』第８号、1937年、p.94

注16）同上

注17）同上

注18）「体育並運動競技関係雑件 第五巻 28. 柔道家黒山高麿外暹暹羅訪問関係」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B04012483300、体育並運動競技関係雑件 第五巻（I-1-12-0-2_005）（外務省外交史料館）

注19）講道館「洪火會暹羅國訪問　柔道普及宣傳旅行の記」『柔道』昭和12年10月号、1937年、p.32

注20）同上記事、p.33

注21）前掲記事（11）、p.94
注22）同上
注23）財団法人暹羅協会『財団法人暹羅協会々報』第９号、1937年、p.123
注24）財団法人暹羅協会『財団法人暹羅協会々報』第24号、1941年、p.153
注25）講道館「暹羅國に於ける柔道の沿革一般」『柔道』昭和13年３月号、1938年、pp.32-33
注26）講道館「シャム國ニュース」『柔道』昭和13年３月号、1938年、p.37
注27）前掲記事（19）、ｐ.32
注28）同上
注29）日本財団図書館ホームページ「芦屋町外二ケ町競艇施行組合」『競艇沿革史』（令和５年６月20日閲覧）
注30）夕刊フクニチ新聞社ふるさと人物記刊行会『ふるさと人物記』、1956年、p.501